

## ネルー記念博物館・図書館訪問記

堀江 洋文

今回の人文研総合研究調査旅行では、参加者の関心は主にラジャスターン州のジャイプル及びマハラシュトラ州に点在するアジャンタやエローラの遺跡群、そして成長するインド経済の中心ムンバイにあったが、最初に訪れたデリーでもネルー記念博物館・図書館(Nehru Memorial Museum and Library)訪問と館長のムカージ(Mridula Mukherjee)博士との面会という重要な予定が日程に組み込まれていた。マハートマー・ガンディーが火葬された聖所ラージ・ガートを訪れた後、我々は国立博物館付近を通してネルー記念博物館に到着するが、広くて良く整備された前庭を通り、博物館前で何人かのスタッフの歓迎を受けた。スタッフの案内でまず博物館の見学をし、その後隣接する図書館内でムカージ女史と会談する予定を組んでいた。

ティーン・ムールティ・ハウス(Teen Murti House)と呼ばれるこの建物は、1947年のイギリスからのインド独立まではインド陸軍最高司令官公邸であり、翌1948年8月にブッチャー(Sir Roy Bucher)将軍の退去以後は、インドの初代首相ジャワハルラール・ネルーの公邸となった。ネルーの死後この建物はネルー記念博物館となり、博物館機能の他に、現代インドに関する図書館、ネルー時代を中心とした現代インド史研究センターという三つの役割を担うこととなった。そして1966年4月にインド政府は、ネルー記念博物館・図書館を管理運営する自治組織としてNehru Memorial Museum and Library Societyを設立したのである。2006年8月に館長に就任したばかりのムカージ氏は、特に研究センターの機能を高めることに言及し、「1947年以降のインドは歴史家の注目をもっと集めてよいし、このセンターでの研究が現代の様々な問題に関する議論に大きく貢献できる。」と述べている。

ティーン・ムールティ・ハウスの博物館は、ネルーという人物を伝える博物館、所謂 *personalia museum* として発展し、館内にはネルーの書斎や寝室、客間等がネルーの死去当時のまま残されている。部屋の中でも最も印象的だったのは、ネルーの首相在任中、スイスのローザンヌで死去した妻カマラに代わってネルーを支え続けた娘（そして後のインド首相となる）インディラの、広いが比較的質素な部屋である。ネルーに寄り添うかたちでインディラがネルーの世話をし、逆に父から、インディラ本人にそのような気持ちがあったかどうかはわからないが、大国インドの統治手法を居ながらにして学んだ様子が容易に想像できるであろう。おそらく、インディラにとっては彼女が獄中のネルーから受け取った「太古の世界に関する簡単な説明を内容とする手紙」、即ち後に『父が子に語る世界歴史』*Glimpses of World History* として刊行さ

れた世界史講義以上に得るものは大きかったのではなかろうか。ところで、館内に展示されたパネルと写真からは、ネルーの政治家としての業績と家庭人の側面の両方を垣間見ることが出来るかと期待したが、私生活を含めたネルー個人を浮き上がらせる展示は比較的少なかった。これはこの博物館の設立目的が、後のムカージ館長との会談で氏からも指摘されたように、「自由に向けての闘争」(the struggle for freedom)にあることを思えばある程度は納得できる。実際に展示の中には、ネルーのみならず彼がバプー(師父)と慕うガンディー関連のものも多く、展示そのものはネルー資料館というよりは、インド独立に向けての闘争の歴史を物語るものとなっている。

その中でネルーの心の内を明らかにする企画として注目されるのは、博物館の次に訪れた図書館入り口ホール近くに展示された Lord Buddha through the eyes of Jawaharlal Nehru と題された企画である。公的生活において、ネルーが宗教を疎ましく思っていたことは良く知られており、ジャイナ教非暴力思想の強いグジャラートで育ち宗教的寛容さを身に付けたガンディーと異なり、ネルーはむしろ無神論的雰囲気の中で育ったと言われている。ネルーは『自叙伝』の中で、組織化された宗教というものを眺める時に、彼の心は恐怖に満たされるとさえ言っている。さらにネルーは、宗教的考え方は明確な思考の敵であるとも明言しているし、ガンディーの「死を決して断食をする」態度に見られるように、ガンディーが政治問題を宗教的な感情的態度で取り上げること、政治問題に関連して度々神に言及することをやや苦々しく思っている。ここには、断食により「バプーが死んだらどうなるだろう。」とのネルーの叫びが表現され、彼のガンディーに対する親愛の情の表れとも思えるが、同時にネルーの宗教観が色濃く出ているとも考えられる。ネルーはガンディーの指導の意義を非常に高く評価していたが、時にガンディーの「偏した精神主義」には批判的であった。そのネルーが宗教の中で実際に興味を抱いたのは、『自叙伝』の中でも告白しているように人生の道としての道教と、今回の企画で明らかにされたように仏陀の教えであった。ムカージ博士も、展示会開会時のパネル・ディスカッションで、ネルーが仏陀に強い関心を持っていた様子を‘truly romantic fascination for the principles Buddha stood for’ と表現している。ネルーが注目したのは、仏陀の宗教的側面というよりはその寛容の精神、あるいは宗教的迷信やドグマに対峙する仏陀の言説であった。ヒンドゥーやイスラム等宗教間の暴力や憎悪の渦巻く独立後のインドで、仏陀の寛容の教えがネルーの心をとらえた事は自然な流れだったのかもしれない。ネルーは、狭義の宗教的意味ではない「政治運動の精神化」は優れた思想だと考えていたようではあるが、他方偏した精神主義化には異を唱えており、ガンディーの非暴力の教義にも絶対的忠誠を誓うものでないと告白している。しかし、反英闘争の中で彼は、インドが置かれた状況や伝統を考えると非暴力非協力が正しい政策であると判断したのである。

ネルー記念博物館は、「自由へ向けての闘争」という文脈でネルーとガンディーの一体性を強調しているようであるが、バプーの言動に対しネルーが違和感を覚える場面はいくつかあったと思われる。そのことはイギリス側も認識していたようで、その代表的事例の一つは、イギリスのインドからの撤退を求めたクイット・インド運動(Quit-India Movement)である。ガンディーの指導の下で、イギリス撤退に向けての広範な非暴力による大衆闘争の開始に合意していた二人も、当時インドを巡る世界情勢の判断においては若干見解を異にしていたようである。ガンディーは1942年4月19日付『ハリジャン』紙上に掲載された記事以降、日本のインド侵攻の可能性とイギリスのインドでのプレゼンスを関連付け、イギリスの撤退によって日本はインドを攻撃する理由がなくなり、逆にイギリスが居座ることにより日本の侵攻を招くとの解釈を示している。これに対しネルーは、もしバプーのアプローチが受け入れられると、インドは枢軸側の受動的パートナーとなるとの見解を持っていたようである。ここで問題となったのは、ガンディーの非暴力主義が、外国の侵略にも適用されるのかとの疑問である。ネルーの著書『インドの発見』が明らかにしているように、会議派は、非暴力の原則と実践を受け入れ、それを自由のための闘いに適用し国内の統一をはかってきたが、この原則を外国の侵略や国内の混乱防止に適用したことはなかった。ともあれ、同年8月までにはガンディーも、民族主義と自由への願望のあまり、もしもインドが自由国家としての働きをすることができるのであれば、会議派の戦争参加に同意してもよいと考えるようになった。ガンディーにとって苦悩をとまなう画期的な心の変化であり、「彼にとって生気の源泉であり、存在の意義となっていた非暴力と、彼にとって支配的な身を焼き尽くすような情熱であったインドの自由との相克において、後者の方に秤の重みがかかった。」とネルーは回顧分析している。

ところで、「自由へ向けての闘争」をテーマとした展示パネルと写真の中で、数少ないとはいえ筆者が最も注目したのはネルーの家族関係である。ネルーは、ガンジス河とヤムナー河の合流点にあるアラハバードの裕福な弁護士一家に生まれるが、父モーティーラール・ネルーは1920年頃から国民会議派の活動でも指導的役割を果たすようになる。ガンディーが一時的に非協力不服従運動を停止させ、それに対してネルーやチャンドラー・ボーズ等会議派内の「急進派」から批判を受けるきっかけとなった「チャウリー・チャウラー村事件」後、会議派は一時的に分裂し、大衆運動(特に農民大衆)に接点を持っていたガンディー派と、スワラージ(自治)は議会進出を通じて可能になると考えて立憲主義に転じつつあったスワラージ派が対峙することになる。C.R.ダース(Deshbandhu Chitta Ranjan Das)没後スワラージ派の指導者となった父ネルーは、1927年にインド統治法改定の諸条件調査を目的としたサイモン委員会の来印をきっかけに、国民会議派を中心とした全インド諸党派協議大会によって設置された憲法起草委員会の委員長として、独自の憲法案を起草する(ネルー・レポート)。しかしその憲法案の内容

が、大英帝国内における自治領(dominion)の地位獲得を前提としたものであったため、完全自治(purna swaraj, complete self-rule 即ち独立)を標榜するネルーやボーズの批判を受け、更には宗教別分離選挙廃止を唱えたレポートであったことから、ジンナー指導のムスリム連盟の賛同も得られなかった。インド旅行前のにわか勉強でこの頃のネルー父子の「軋轢」が頭にあったため、案内してくれた博物館スタッフに二人の関係を聞いてみた。彼の答えは、‘Well, it was very good. No question about it.’ 筆者には少しばかり意外であり、やや不満であった。しかし、帰国後ネルーの『自叙伝』をひっくり返してみると、ダースがネルーをスワラージ派の信条に改宗させようと試みたのに対し、父ネルーは、当時スワラージ派のことに非常に熱心であったが、決してネルーにその方向に向かうよう押しつけることもなかったし、説得しようともしなかったとある。そして、「父は私が彼の陣営に参加すれば、非常に喜んだかもしれないが、しかし私への異常な考慮から、この問題については私の自由にまかせておいたのであった。」とネルーは当時の状況を分析している。

ネルーの幼少時代からのネルー父子の関係をみていくと、強い愛情で結ばれた家族の絆が見て取れる。博物館のパネル展示においては多くを見ることができなかったが、ネルーの英国留学時代には、多くの手紙が二人の間を行き来しているし、富裕なネルー家はヨーロッパへもしばしば足を伸ばし、このあと見学する図書館 2 階にある古文書室(archives)では、マルセイユをはじめ各地から父ネルーがわが子に送った手紙を読むことができた。その中でも筆者の目にとまったのは、ネルーがハーロー校留学後に進学したケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ到着一週間後に、父宛に書いた 1907 年 10 月の手紙である。‘Dear my father, Tomorrow I complete my first week at Cambridge but I have hardly settled down yet. I have only just succeeded in making up a list of the lectures I have to go to, and even that is liable to alteration. As for games I have not taken part in a single one yet. I sent in my name for the First Trinity Boat Club...’ 短いながらも大学入学時の不安と期待が読み取れるし、カレッジ・ボートクラブへの言及は、昔スポーツマンであった父ネルー(レスリング)への気遣いがあったのかもしれない。インド各地を転住する可能性の高い文官になることは全く考慮に入れていなかったネルーは、ケンブリッジで科学を専攻しその優等試験に合格すると、弁護士を目指しロンドンの法学院(一般には Middle Temple であったと言われているが、博物館スタッフは Inner Temple と説明)に入学する。ネルーはアラハバードで、家族と離れることなく父ネルーとともに弁護士活動を行おうと考えていたと思われる。不思議とネルーがこの法学院に在学していた 2 年間についての情報が、パネル展示でもネルーの『自叙伝』の中でも殆ど残されていない。

他方、古文書室保管史料の中には、父ネルーと孫娘インディラとの強い結びつきを示すものもある。1926 年 3 月から約 2 年間、ネルーはカマラとインディラを連れてスイスのジュネー

ヴに滞在するが、その間ネルーはインド人訪問者のほかにロマン・ロランに会ったり、ブリュッセルで開かれた被圧迫民族会議に出席したりしている。この頃送られた父ネルーのインディラ宛の手紙は、孫娘への愛情で満ちている。‘You should learn to speak French. But do not forget Hindi and English — Otherwise your Dadu will not be able to talk with you.’ 父ネルーはこの手紙を書いた直後にヨーロッパを訪れ、ネルー夫妻やインディラとともに、モスクワでソヴィエト革命 10 周年祝賀祭に参加している。ところで、ネルー記念博物館・図書館の古文書コレクションは二つのカテゴリーに分類でき、一つは各種組織及び機関に関するもので、もう一つは個人の私文書である。前者には、全インド会議派委員会(All India Congress Committee)や全インド労働組合会議(All India Trade Union Congress)のコレクション等が含まれ、後者の個人コレクションには、インディラ等著名な政治家、外交官、法律家、企業人等のものがある。

博物館のパネル展示は、「自由に向けての闘争」のテーマを忠実にフォローして、国民会議派の興隆、ベンガル分割反対運動、全インド労働組合会議創立、第一次世界大戦時のインド防衛法に代わる治安維持法としてのローラット法案への抵抗運動、ガンディーの非暴力的非協力運動、塩の行進、1935 年インド統治法、第二次世界大戦突入と国民会議派によるクイット・インド・インドア決議、ムスリム連盟と戦後のインド・パキスタン分離独立(Partition)等インド史上の分岐点を簡潔に描写している。パネル写真の中で、一つだけ大きく日本が取り上げられている場面が印象的であった。それは、2 年前にスマトラ島バンダ・アチェ沖を震源とする地震をきっかけに起きた津波で甚大な損害を被ったアンダマン諸島を、開戦後まもなく占領した日本軍の兵隊と彼らが設置した収容所の写真である。(チャンドラ・ボーズは、1938 年に会議派議長に選出されるもガンディーと対立し、ドイツ経由で 43 年 5 月には日本に亡命する。同年 10 月ボーズを首班とする自由インド仮政府が日本政府の後押しでシンガポールに成立し、翌月ボーズも出席した東京での「大東亜会議」で東条英機首相は、将来このアンダマン諸島と隣のニコバル諸島を仮政府の管轄下に移すと語ったが、この約束が実行されることは無かった。終戦直後、ボーズはインド独立を勝ち取るため今度はソ連へ亡命しようとするが、その途上台湾上空での飛行機事故で死亡する。現在杉並区和田の蓮光寺にはボーズの碑が建立されているが、寺には戦後この碑を訪れたネルー、インディラ、そして最近ではヴァジペーイー首相の言葉が残されている。) 日本への戦後賠償請求権を放棄し、また極東国際軍事裁判で日本の A 級戦犯たちを無罪とする少数意見を述べた「パール判決」等のゆえに、中国や韓国のような日本の近隣諸国と違いインドが日本を見る目は優しいと錯覚する日本人にとり、このアンダマン収容所の日本兵の写真はやや衝撃的である。確かに開戦当初のマレー沖でのイギリス戦艦プリンス・オブ・ウェールズの轟沈はインド国民の喝采を受けたようであるが、ネルーは反英闘争を掲げながら

も反ファシズムの立場を堅持している。42年に採択された全インド会議派委員会の「イギリスに対するインド撤退要求決議」の中では、ロシア及び中国国民に対し、彼らの自由を防衛するための英雄的行為を高く評価している。

近年IT産業を中心としたインドの経済成長に注目が集まっているが、写真パネルの中には、戦後の5ヵ年計画に代表されるネルーの計画経済や重工業化政策、更には公共部門優位の政策立案等に関する展示はほとんど見られなかった。これらの政策が結果的に実を結ばなかったのみならず、所謂「自由に向けての闘争」のテーマから外れる理由からでの除外であろうが、経済的自立なくして国の或いは国民の自由が成り立たないことを考えれば、ネルーの経済社会との関わりにも着目した展示が待たれる。現在のインドは、中間層の拡大によりムンバイ等大都市を中心として経済活動に拍車がかかっているが、長い間の懸案である貧困農民の苦境は捨て置かれ、経済格差は拡大しているとも言われている。事実インド経済を牽引するムンバイでさえ、スラム街は、広大なムンバイ市の中心から郊外に至るまであらゆる地域に点在する有様であることは、我々も今回の旅で何度も目撃した。我々が訪れたアジャンタやエローラのあるマハラシュトラ州の東部農村地帯（特に今回の旅でもしばしば通過した綿花作付け地帯）では、不作等の結果生まれた多額の借金返済を苦に自殺する農民が増えているとのニュース報道を最近よく耳にする。ザミンダール排除等に代表される独立後の土地改革にもかかわらず、農村が貧困の温床であることは、ガーンディーの時代から今もほとんど変わっていない。ガーンディーのみならずネルーも、20年代にはキサン(農民)の間を遊歴し、彼らと食事を共にしながら話し合ううちに、農民がインドにとっていかなるものか分かってきたと『自叙伝』で告白している。このようなネルーの農村や農民との関わりに焦点を合わせた展示の充実も望まれる。

博物館見学後訪れた図書館で「ネルーの目から見た仏陀」展を見た直後、先にも触れたように我々は2階の古文書室へ向かったが、その途中で口述史プロジェクト(oral history project)の部屋の前を通過した。時間の関係で入室はかなわなかったが、このプロジェクトは各界の要人とのインタビューを通じて、インド独立運動指導者に関する回想を記録しようとする試みである。このような独立運動指導者には、ガーンディーやネルー、更にはチャンドラ・ボーズやラージパト・ラーイ、あるいはロマン・ロランによりガーンディーにも対比せられたティラク等が含まれる。ネルーやインド国民運動との関連でインタビューに応じた外国人には、最後のインド総督マウントバッテン卿、西ドイツ首相ウイリー・ブラント、マーティン・ルーサー・キング夫人等多数の著名人がいる。また、古文書室見学後通された写真アーカイヴでは、図書館スタッフが我々のためにネルー訪日時の写真を机の上に用意して下さった。館員の説明を皆が聞いている間筆者は、部屋の隅にあったカタログで興味のおもむくまま「バンドン会議」「スペイン市民戦争」等の項目を検索してみたところ、かなりの数の写真が保管されているこ

とが判明した。筆者が10年ほど前に訪れたインドネシアのバンドン会議場は、お世辞にもしっかりと保全されていたとは言いがたく、当時の状況を想像することは至難の業であったため、このアーカイブの写真で当時の状況や景観を確かめたかったが、これも時間の関係で今回の楽しみとなった。

最後に案内されたセミナー・ルームで我々は、ムカージ博士や図書館スタッフと歓談の時を持った。出されたチャイやインド名産のカシュ、スナックのサモサールを食しながら、博物館・図書館の運営や予算規模等についての質問を行った。ムカージ先生も、訪日時の思い出、特に日本のインド研究者との交流について語って下さった。ムカージ先生は2004年に *Peasants in India's Non-violent Revolution: Practice and Theory* という著書を上梓されているが、この著書のタイトルが示すように、第1部ではパンジャブ州農民が自由に向けた闘争の中でどのような政治的実践を行ったかを詳述し、第2部では理論問題を扱っている。ネルー大学でも教鞭をとるムカージ先生は、古文書を使いこなす歴史家の側面と社会学的方法を基礎としたフィールドワークの技術の両方をあわせ持ち、インドの社会運動解析のために必要な実践と理論の適切なバランスを持ち合わせた研究者である。会談後、我々はムカージ先生や図書館スタッフと一緒に記念撮影をし、図書館前で館員の見送りを受けた後、インド門経由で第1回インド総合研究旅行以来2度目の訪問となる、シャー・ジャハンのモスク、ジャマー・マスジッドに向かった。

## 参考資料

ジャワハルラール・ネルー『自叙伝 インドの最近の事象に関する冥想』竹村和夫、伊與木茂美共訳、国際日本協会、上下二巻

ジャワハルラール・ネルー『父が子に語る世界歴史』大山聡訳、日本評論新社、全三巻

ジャワハルラール・ネルー『インドの発見』辻直四郎他訳、岩波書店、上下二巻

坂本徳松『ネルー 人間・思想・政策』日本出版共同株式会社刊

内藤雅雄、中村平治編『南アジアの歴史 複合的社会の歴史と文化』有斐閣アルマ

John Keay, *India: A History* (London, 2000)

Mridula Mukherjee, *Peasants in India's Non-violent Revolution: Practice and Theory* (New Delhi, 2004)

Gyanendra Pandey, *Remembering Partition: Violence, Nationalism and History in India* (Cambridge, 2001)

Department of Culture, Ministry of Tourism and Culture, *Indian Culture: Tradition and Continuity —Profiles of Cultural Institutions—* (New Delhi, 2002)

Nehru Memorial Museum and Library 紹介パンフレット

*The Indian Express* (2006年8月11日及び12月22日付オンライン版)

*Statement Exhibiting the Moral and Material Progress and Condition of India during the year 1928-29* (London, 1930), House of Commons Parliamentary Paper online

*India: Statement Published by the Government of India on the Congress Party's Responsibility for the Disturbances in India 1942-43* (London, 1943), House of Commons Parliamentary Paper online



写真アーカイヴでネルー訪日時の写真を見る所員





古文書室にて



ムカージ先生に記念品を渡す内藤所員